

バスケットボールプラザ

Basketball Plaza

No.88



2020年12月

NPO 法人 日本バスケットボール振興会

目 次

- 令和2年度12月 今後の活動の進め方・・・・・・・・・・理事長 渡辺 誠・・・ 2
- 令和2年度 天皇杯・皇后杯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3
組み合わせと1次ラウンドの結果
- 【先人の軌跡】・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・歴史部・・・ 6
日本バスケットボールの原動力「実連」の誕生
- シニアチーム紹介 シルバーキッズ（兵庫県）・・・・・・・・・・普及部・・・12
- 会員だより
☆ スポーツと障がいのある人達（その3）・・・・・・・・・・上谷 富彦・・・15
ーコロナ禍後のスポーツについてー

☆ リングに向かって“跳べ”10年後の子供達・・・・・・・・・・鈴木 承二・・・17
その8：埼玉県富士見市西中学校男子バスケット部
- 高校籠球ふるさと記（静岡県編）・・・・・・・・・・事務局・・・19
- 神田バスケットボール資料室（2020年12月）・・・・・・・・・・事務局・・・25
- 事務局だより・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 30
- プラザ こぼればなし・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 31

令和2年度12月 今後の活動の進め方

理事長 渡辺 誠



新型コロナウイルスの感染拡大が止まらない状況で、今までと異なった対応が求められています。Bリーグ、WJBLなど国内の大会の開催についても、選手はもちろんスタッフ、観客などすべてに、新型コロナウイルス感染の予防が必要となります。大会の運営側にとっても、感染予防の対策に万全を期して開催するわけですが、その時々判断が非常に大切になります。

振興会としての活動の進め方を、「プラザ87号」に示しましたが、12月予定されていた定期理事会の開催も中止といたします。

令和2年度の理事会（4月9日開催予定）は、定款35条第2項に基づき、書面議決させていただき、5月28日、監事による業務監査、会計監査を実施いたしました。総会については、6月2日に会員の皆さんに「令和2年度通常総会資料」を送付し、各議案について賛成・反対の回答を書面議決していただきました。

令和3年度の「通常総会資料」の作成の進め方について概要を報告いたします。

1) 令和2年度の事業活動報告

・編集部

「プラザ86号」、「プラザ87号」、「プラザ88号」などを編集部皆さんの協力のもと発行し、「プラザ89号」も来年発行する予定です。「高校籠球ふるさと記」、「先人の軌跡」、「神田バスケットボール資料室」などの記事を掲載しました。

・普及部

「第13回代々木シニアバスケットボール交歓大会」の開催を中止、「中学生クリニック」の実施についても開催地と打ち合わせの上開催を中止しました。「12月21日はバスケットボールの日」のイベントについても安全・安心での開催が困難と判断し中止になりました。

・歴史部

「神田バスケットボール資料室」を開設し、資料室を公開し閲覧を行っています。「プラザ」の各号に、資料室で保管している資料を整理してその内容を掲載しています。

2) 令和3年度事業活動計画（案）、事業会計収支予算（案）の作成について

令和3年度事業活動計画（案）は、令和2年度の事業計画に基づいて作成、事業会計収支予算（案）についても同様に作成する予定です。

第2期スポーツ基本計画（2019～2021）は、スポーツ参画人口の拡大、スポーツを通じた活力があり絆の強い社会の実現、などを目標にしています。振興会の活動を通し、会員の交流を図り、今後のバスケット界の展望につなげたいと考えています。

以上

第 96 回天皇杯 第 87 回皇后杯

組み合わせと 1 次ラウンドの結果

[編集部]

今年度開催の「第 96 回天皇杯 第 87 回皇后杯 全日本バスケットボール選手権大会」は、昨今の新型コロナウイルス感染症感染の全国的拡大状況等を鑑み、今年度に限り、大会方式を一部変更（規模縮小）することを決定したと主催の J B A が 8 月 19 日に発表した。

内容は下記のとおりで、組み合わせは 9 月 18 日に発表され、各ラウンドの観客の有無については現段階で未定と知らされたが、1 次ラウンドについては 11 月 4 日の通知により無観客対応で開催された。

また、12 月中旬開催の 2 次ラウンドは、11 月 12 日に有観客の開催と通知され、今後の新型コロナウイルス感染症拡大状況により有観客開催が変更となる可能性のあることを前提に、チケットが販売されることとなった。

天皇杯

大会方式 トーナメント戦によるノックアウト方式

出場資格 B.LEAGUE：B 1 リーグにおける昨季暫定順位 1～8 位チーム

B 3 リーグ：昇降各反映後の昨季順位 4 チーム

都道府県代表：昨年度大会の成績をもとに上位都道府県の代表 8 チーム

出場チーム・日程 組み合わせは後述

○1 次ラウンド（1・2 回戦）（結果は下記組み合わせ表参照）

日程：11 月 28 日（土）～29 日（日） 会場：国立代々木競技場 第一体育館

○2 次ラウンド（3 回戦）

日程：12 月 16 日（水）～17 日（木） 会場：2 次 R から出場 B クラブホームエリア内アリーナ

○3 次ラウンド（4 回戦）

日程：1 月 13 日（水） 会場：3 次 R から出場 B クラブのホームエリア内アリーナ

○ファイナルラウンド（準決勝・決勝）

日程：3 月 12 日（金）～13 日（土） 会場：さいたまスーパーアリーナ

皇后杯

大会方式 トーナメント戦によるノックアウト方式

出場資格 W リーグ：全 12 チーム

都道府県代表：昨年度大会の成績をもとに上位都道府県の代表 8 チーム

出場チーム・日程 組合せ後述

○1 次ラウンド（1・2 回戦）（結果は組み合わせ表に記載）

日程：2020 年 11 月 28 日（土）～11 月 29 日（日）

会場：全国 3 会場（神奈川県、愛知県、大阪府）

○ファイナルラウンド（準々決勝～決勝）（組み合わせは 11 月 30 日に発表）

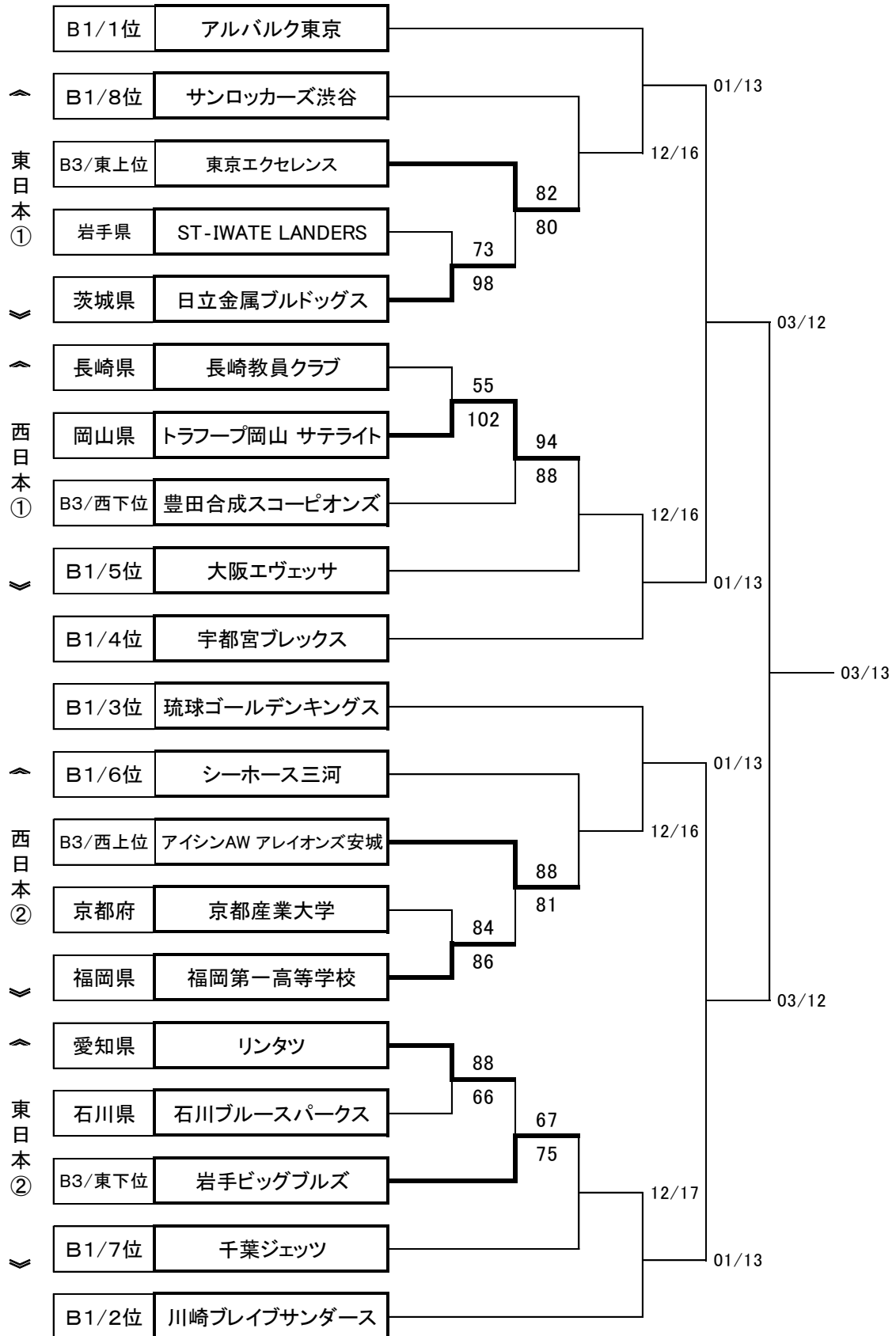
日程：12 月 16 日（水）～20 日（日） ※12/18（金）はレストデー

会場：国立代々木競技場 第二体育館

天皇杯 組み合わせと1次ラウンド結果

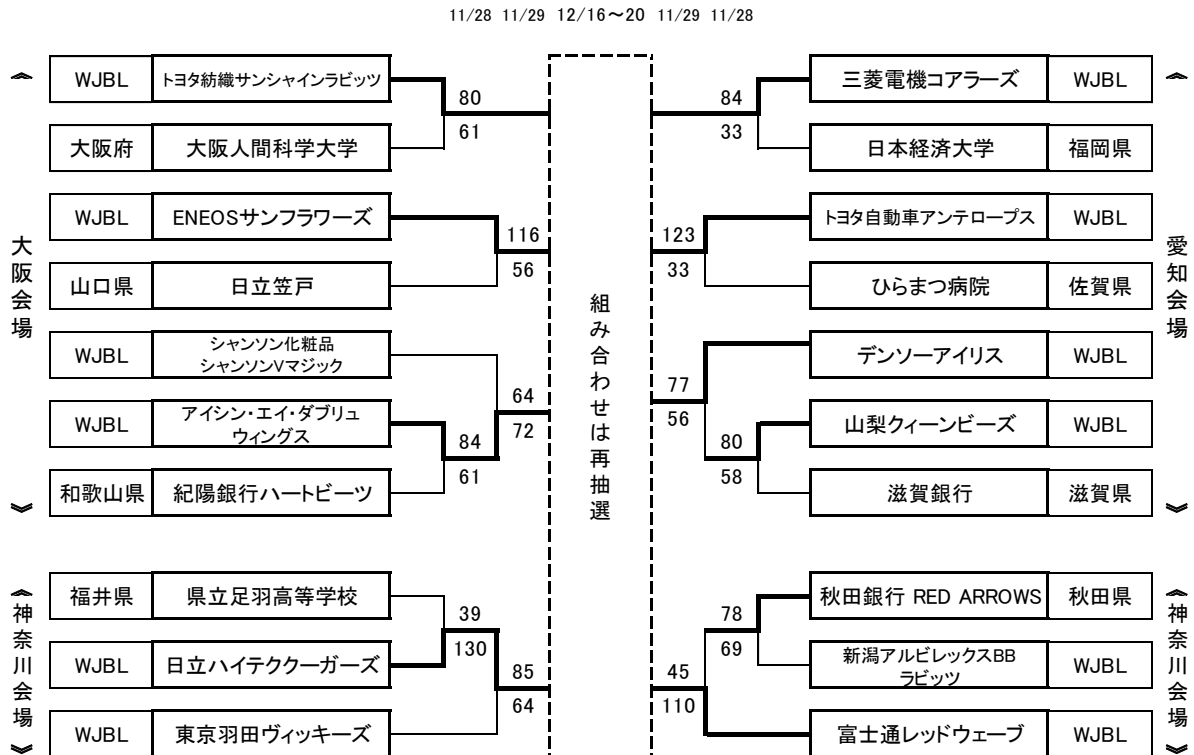
11/28 11/29

左記・下記の数字は開催日

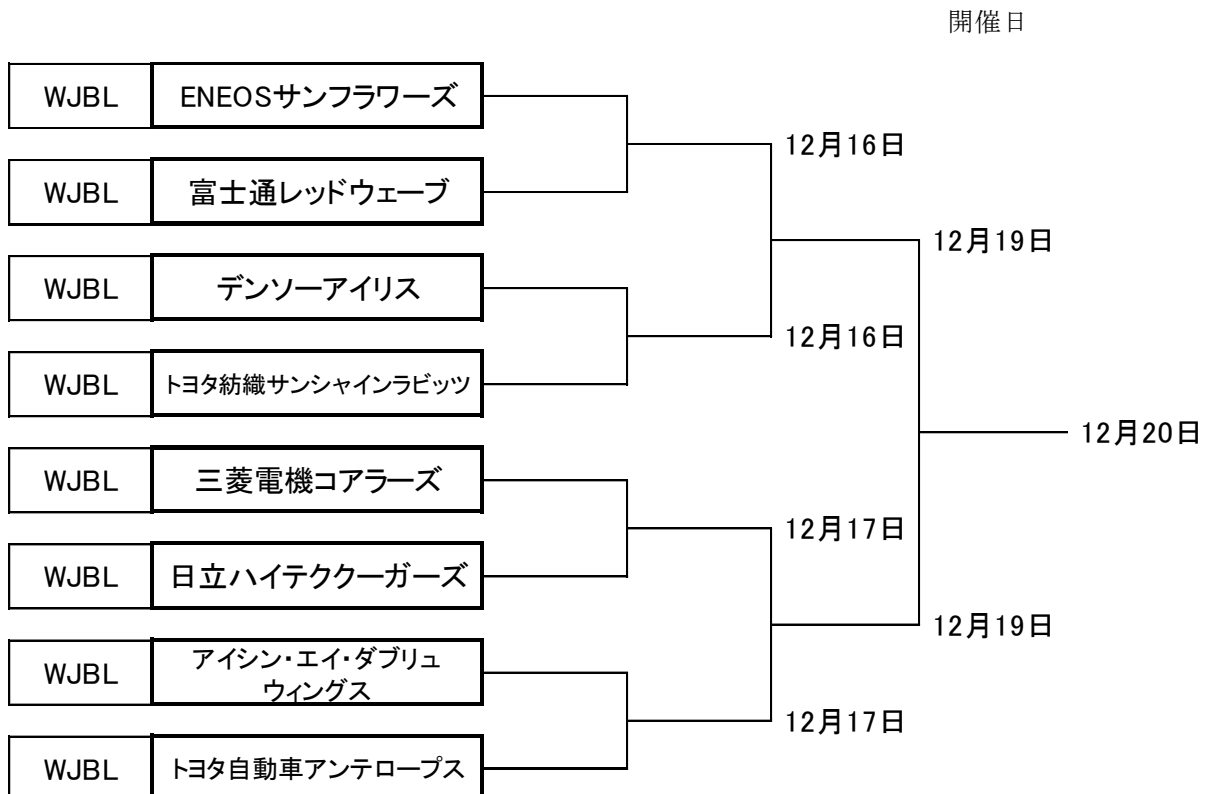


皇后杯 組み合わせと1次ラウンド結果

1次ラウンド結果



ファイナルラウンド組み合わせ



【先人の軌跡】

日本バスケットボールの原動力「実連」の誕生

「実業団連盟」の設立から第二次世界大戦による中断まで

[歴史部]

昭和8年3月31日発行「籠球」第六輯に、遠藤一男（簡易保険局・東大OB）は、「東京実業団展望」と題して、「実業団連盟」の設立の経緯について次のように語っている。

『曾つては学校その他一部の人々のみの専有であった籠球競技の最近に於ける実業界官界への著しき進出はわれら同好の志に取りて喜ばしき現象である。かかる大勢に従ひ既に大日本バスケットボール協会の手によりクラブチーム選手権大会が挙行されて居たが一つの官庁、会社、銀行、商店等を代表する純粹なる実業団チームのみよりなるリーグ戦は未だその実行を見るに至らなかった。されど吾等斯技に携はる者にはひとしく斯る聯盟出現を待ち望むものがあつた。その希望は、遂に実現した。 - 中略 - 現在日本に於いて籠球は、野球、庭球、ラグビー、ホッケー等団体球技中夜間に於ける唯一のものである。かかる意味で日曜日以外に休暇を有せざる吾等サラリーマン階級にとっては斯技こそは普及性の最も濃厚なるものであり、実業団リーグ戦が籠球界の年中行事の一となるのも遠い夢ではないであろう。』

昭和初期の時代背景

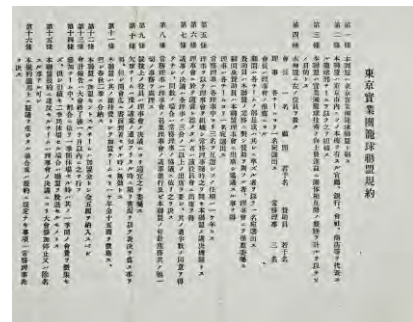
関東大震災で焼失した東京YMCA体育館は、1931年（昭6）には再建され、多くのチームがバスケットの練習をしており、1921年（大10）第1回全日本選手権大会、1924年（大13）第1回大学リーグ、第1回クラブ選手権などの大会が開催されていた。発足当時の実業団連盟では、9チーム中、3チームが東京YMCAに加盟していた。

昭和の初期から学校で行われてきたバスケットボールも東京YMCAを中心にいくつかの実業団チームが誕生し、クラブ選手権の大会に参加していた。昭和7年夏ごろ、系統だって、しかも組織化された団体をつくりたいとの声が随所から出てきた。

イーグル（人見・東京YMCA）、簡易保険局（東大OB・遠藤一男）、研究社（明大OB・小酒井益蔵）、貯金局（安川鉄雄）、東京海上（田口栄太郎）、宮内省（井樽要嗣）などが、神田のライオンベーカリーや東京YMCAの食堂に集まり、数次に及ぶ会合を行った。また実業団チームは、YMCA体育館、明治大学体育館、国民体育館、新宿の府立六中体育館、中野の東京高校体育館などで練習や試合をしていた。

大日本体育協会・籠球部主任の薬師寺尊正（YMCA）に協力・後援を得ており、当時、バスケットボールのメッカは何とんでも東京YMCAの体育館であった。

学校単位（中学・高校・大学生）大会やクラブチームなどの大会とは異なる社会人による実業団チームの大会母体である「東京実業団籠球連盟」が1932年（昭7）10月10日に誕生した。



東京實業團籠球聯盟規約

バスケットボールの原動力 実業団連盟の誕生

日本バスケットボールの歴史の中で、バスケットボールの普及が進み、実業団連盟が発足したことが「日本バスケットボールの活動の原動力」なるはじまりであった。

「東京実業団籠球連盟」

下記第1回大会参加のチームは、以下の9チーム（主な登録選手）。

- ・簡易保険局（15名）（三田の簡易保険局3階屋上にバスケットコートがあった）
- ・研究社（アメリカ遠征経験のある明治大学OB小酒井益蔵を含む8名）
- ・宮内省（覺張久吉含む8名）
- ・三越（宮腰を含む11名）
- ・貯金局（11名）
- ・常盤生命（土肥一雄含む7名）
- ・太陽生命（13名）
- ・海軍省水路部（12名）
- ・東京海上（田口栄太郎含む14名、東京YMCAに加盟、国民体育館、明治大学、府立六中などで活動）

加盟金5円、年間維持費15円、当時「運動社」の「ラバーバルブ付きのボール1ケ」金10円、バスケットボール靴 1足3円50銭。「年間維持費」「ボール」「シューズ」など当時の価格と比較するとバスケットを続ける選手にすればかなりの負担の金額であった。

以下に、第2次世界大戦開幕までの大会概要を列挙する。

1932年～1934年 研究社・簡易保険局・三越などが優勝

第1回大会 1932年（昭7） 優勝 研究社

主催 東京実業団籠球連盟

後援 大日本バスケットボール協会（富田毅郎、大村泰三、池上虎太郎）。

その後、厚生省（厚生省が国民体育館を所轄していた・森秀、相沢利助、妹尾堅吉）、東京朝日新聞（山田五郎）、東京YMCA体育部（柳川亨）などが後援に加わる。

リーグ戦は、11月6日から12月18日までYMCA、東京高校、府立六中、明大コートを使用して行われた。毎日曜日、開始時間は、12時30分～、14時～、15時30分～1日に3試合（1試合90分間）行い、三越チームのみ勤務日の関係で火曜日あるいは水曜日19時～、試合を東京YMCA体育館で行うと配慮している。

第2回大会 1933年（昭8）（春季） 優勝 簡易保険局

春季は、9チームが参加しリーグ戦を行ったが、数多くの試合を希望するチームが増え、春と秋の2回リーグ戦を行うようになった。

第3回大会 1933年（昭8）（秋季10/11～11/14） 優勝 研究社

優勝の研究社は明大OB小酒井兄弟が中心のチーム。

常盤生命は早大OB土肥一男（のちにナショナルチームのコーチ、昭和初期の技術面の理論家の一人）のチームで、春のリーグ戦の棄権が多く、秋のリーグ戦を不参加。

白木屋が新加盟し、第1部5チーム、第2部4チームでリーグ戦を開催。

入れ替え戦は行わず、1部の最下位と2部最上位と自動入れ替え制。

同年に「関東百貨店籠球連盟」も結成された。

第4回大会 1934年（昭9）（春季） 優勝 三越

優勝の三越は宮腰中心のチーム

第5回大会 1934年(昭9)(秋季) 優勝 三越
常盤生命が脱退し、東京瓦斯電気、FHMが新加盟、
秋のリーグ戦から1部、2部共に5チームのリーグ戦。

1935年～1939年 東京海上の時代(5連覇、3連覇)、簡易保険局、日本電気

第6回大会 1935年(昭10)(春季) 優勝 簡易保険局

第7回大会 1935年(昭10)(秋季) 優勝 東京海上

東京海上は、昭和10年に入社した鈴木西平が、明治大学籠球部のアメリカ遠征(昭和7年12月～昭和8年4月)で学んだ理論・経験を実践してチームの強化をおこなった。この猛練習は評判を呼び、選手の中には不満を言う者さえいたが、その結果、昭和10年から昭和14年に至る5年間は、東京海上の8回優勝した全盛時代であった。強豪校であった千葉商業高出の選手を多くスカウトし強化も努めた。

研究社、FHMが脱退し、秋のリーグ戦は、8チーム1部のみのリーグ戦を行った。

第8回大会 1936年(昭11)(春季) 優勝 東京海上

第9回大会 1936年(昭11)(秋季) 優勝 東京海上

創設から参加していた太陽生命、常盤生命、研究社の3チームが選手の不足から前年度に脱退し、マツダ、沖電気、東京堂、王子製紙などのチームが新加盟。1部6チーム、2部4チームのリーグ戦。

新加盟のマツダは、東芝の前身で、大正の末からチームがあり、クラブ選手権には参加していた。

第10回大会 1937年(昭12)(春季) 優勝 東京海上

第11回大会 1937年(昭12)(秋季) 優勝 東京海上

連盟創設以来、その発展、普及の拡大は一途を順調にたどり、旧制の中学、商業高等学校でバスケットボールをやった人たちが各会社に就職し、会社でも各事業所がクラブを作るようになり東京から近県へと広がりつつあった。その結果、加盟チームの範囲を東京から関東地域に広げ「関東実業団籠球連盟」に改称した。

日立製作所、東京モスリン、中島飛行機などが加盟し、春、1部・2部共に6チームでリーグ戦、秋は16チームが登録、1部・2部共に8チームリーグ戦。

秋のリーグ戦から日本鉱業が加盟。日本鉱業は、昭和12年入社(山口高校一東大OB)が先輩の佐伯利生(戦死)と図って、まだボールを握ったことはないが体格のよさそうな若い人たちを集めて日鉱籠球部のチームをつくった。昭和15年、商業高校出身者をスカウトした。当時、強かった東京府立一商出身者、喜多、右村などが入社し、昭和16年から一部に昇格した。日鉱籠球部は、一商出身者が多くいろいろなコネを使ってスカウトした。

室内の正規コートをもつ神田国民体育館が完成した。国民体育館に在籍の妹尾堅吉(明治大OB)に国民体育館、柳川に東京YMCA、それぞれのコート手配について協力を得た。国民体育館は、狭かったが通常2面コートを設営、決勝戦のみ1面コートで試合をした。

第12回大会 1938年(昭13)(春季) 優勝 日本電気

第13回大会 1938年(昭13)(秋季) 優勝 東京海上

春のリーグ戦から日本電気、小倉石油が加盟した。春は、3部制17チーム、秋に、東京モスリンが脱退したが、東京市役所、北辰電気、恩友会などのチームが加盟し、

3部制 20 チームに増える。

同年、東大から鹿子木、小林の両選手が神奈川県の日産自動車（横浜）に入社した。実業団の3部に加盟したが、当初は、正直のところ試合にならなかった。

第14回 1939年（昭14）年（春季） 優勝 東京海上

第15回 1939年（昭14）年（秋季） 優勝 東京海上

春に、厚生省、東京市役所、末田薬局（中央区日本橋浜町にあった薬局で、3代目末田憲男談によると、当時は、バスケット以外に卓球部、野球部などがあり、100名以上の従業員がいたとのこと）が加盟。3部制 23 チーム。

秋に、昭和鉱業、日本曹達、大島製鋼などが加盟、日本電気が脱退し、3部制、22 チームの構成。

第8回春からリーグ戦参加した東京堂（相野谷森次）は、第14回のリーグ戦2部で6戦全勝優勝、15年秋季から1部昇格、16年春季リーグ戦で5勝1敗の2位となった。相野谷は「会社で商業高校を持っていて私が体育の講師で毎朝体操の時間があり、背の高いのは、その時目をつけて練習させた」という。東京市役所チームに三橋誠が選手として参加しているが、傭兵（いわゆる助っ手）だった。

日産自動車は春に3部で全勝優勝、秋に2部で全勝優勝して、1部に昇格した。

「日産自動車の思い出」 鹿子木健日子

昭和13年春に日産自動車に入社。日産に当時横浜の名門Jクラブの鈴木敏雄、高松商高でFをしていた北原正夫などがおり、兵役から戻って14年に入社した京大の石川清一と相談してチームが結成された。横浜YMCAの大会とか、日曜日に4ゲームをこなす地区の大会で連戦連勝。14年の秋に実業団連盟に加盟させてもらった。3部で優勝し、会社もゲームに出れば負け知らずの成績に気を良くしてマネージャー古田奏彦の肝いりで応援団もできた。チーム力強化のため選手のスカウトに乗り出し15年には、横山堅七を採るべく当時の村上正輔社長の了承も取りつけた。しかし横山は、日本鋼管にとられたものの東大のG小林孝を加え旧制中学校卒の工員養成機関に入所した若い人たちの強化にも手を染めた。それまでは、千葉商OBを主体にした東京海上の全盛時代で喜多、小川の日鉱、鋼管、三菱商事、日立製作所などチームが従来の日本電気、三越、貯金局、東京堂などと入れ替わりつつあった。「実業団時代の開幕期」といえるだろう。その頃のコートは神田のYMCAが中心で、時には国民体育館でコートを2面利用したこともあった。横浜が本拠だったが、すでに「月月火水木金金」と軍需産業の一端を担う多忙な勤務の中、試合となれば数十人の応援団が駆けつけてくれたのが印象に残っている。チームを結成してから国内戦では一度も負けたことはなかったが、実業団3連覇ということで16年に来日した満州国チームと神宮プールの板張りコートで対戦し、唯一惜敗した。

1940年～1942年活動の中断まで 日産自動車の5連覇

第16回 1940年（昭15）年（春季） 優勝 日産自動車

第17回 1940年（昭15）年（秋季） 優勝 日産自動車

春は、日本興業銀行、田中商店、日立航空、昭和鉱業などが加盟。田中商店は新加盟であったが、3部で全勝優勝している。3部制、26 チーム。

紀元2600年奉祝大会として第17回の秋のリーグ戦を行うべく広く新加入を呼びかけた結果、男子43チーム・女子7チームの編成となった。

田中商店、末田薬局など日本橋界隈にある個人商店のチームが加盟したことは日本橋にある三越の影響ではないかと記録で語られているが、名前の知られた会社ではない個人商店の規模の会社にも広くバスケットボールが広まったと考えられる。YMCAの会員は、東京海上と三越、東京堂などで、大学卒の人達が実業団に出場し始めたのは、昭和10年前後。個人商店の選手は、中等学校卒業の人達が中心だったのではないか。1部に昇格した日産自動車が初優勝。日立・亀有工場、勸業銀行、横浜ゴム、日本郵船、立川製氷、自動車工業、大蔵省、航空計器、東京計器、日立亀戸、横河電機、日本鋼管、立川飛行機、東京市療養所、第一生命など多くのチームが加盟した。



第17回リーグ戦プログラム表紙

43 チーム4部制。この年、明治神宮外苑水泳場に床張りコートが完成した。

第18回 1941年(昭16)(春季) 優勝 日産自動車

第19回 1941年(昭16)(秋季) 優勝 日産自動車

春、日本海運、宮田製作所、日産化学、森永製菓、富士電炉など多くのチームが加盟、田中商店が脱退。6部制、男子 45 チーム。

第19回にトーナメントを行い、優勝は日産自動車、準優勝は初参加の三菱商事、日本石油(小倉石油からチーム名変更)。

第20回 1942年(昭17)(春季) 優勝 日産自動車

春のみ開催。日本発送電、三菱信託、東亜海運、田辺商店、化学工業、日立戸塚などのチームが加盟、6部制リーグ戦、戦前の最高、50 チームが参加。

日産自動車チームが1部に昇格した第16回大会から第20回大会まで全勝優勝し、負け知らずであったことは特筆される。

1942年(昭17)秋季~1946年(昭21)春季まで 第二次世界大戦により 活動中止

1942年9月に実業団連盟は「大日本体育会」に統合され、関東実業団リーグ戦はこの年の春季大会が最後となった。

秋季は、体育会の下部組織(籠球部会)で錬成大会として開催、神宮水泳場の上に板張りコートで試合をしたとのこと。(東京堂の相野谷森次による)

戦時中のため、試合中時々警戒警報がなったりしたが、試合を続けたという。(東京海上の田口栄太郎による)

錬成大会として1943年春ごろまで大会を開催、1943年から3年の空白があったが、戦後いち早く復興できたのは戦前の地盤ができていたからと三ツ本常彦(日本興業銀行)は語っている。

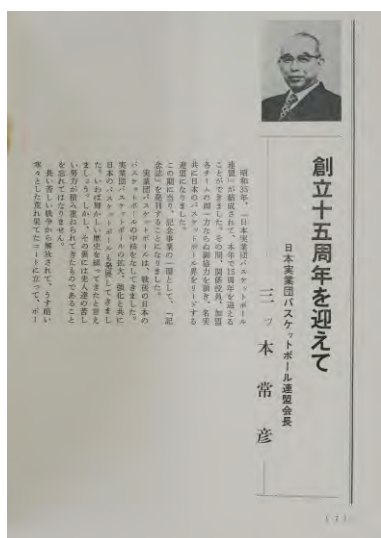
以上、バスケットボールの原動力となる社会人の企業チームを中心とした東京実業団連盟から関東実業団連盟への変遷を説明したが、関西もクラブチーム中心の小規模選手権大会から企業チームによる実業団連盟が誕生している。

関西実業団連盟と日本実業団連盟の誕生

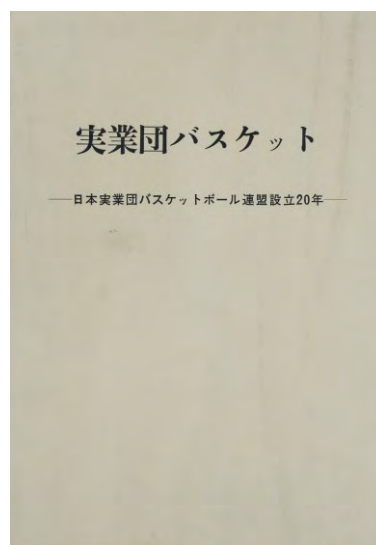
地方の実業団の大会として、1941年（昭16）には、大阪市実業団大会、兵庫県実業団選手権などが開催されている。1946年（昭21）に関西実業団連盟が結成され、1947年（昭22）には大阪・西宮で「全日本実業団選手権大会」が男子のみ開催された。1960年（昭35）には全国の地方実業団連盟が統合され、「日本実業団バスケットボール連盟」が発足し、「全日本実業団選手権大会」は主管を日本実連とし日本協会との共催となった。

<参考資料>

- ・「籠球」 第六輯 昭和8年3月31日
大日本バスケットボール協会
- ・「実業団バスケット」 昭和50年7月6日
日本実業団バスケットボール連盟
- ・「実業団バスケット」日本実業団連盟設立20年 昭和56年4月12日
日本実業団バスケットボール連盟/実業団バスケットボール連盟協力会
- ・「関実バスケット」創立50周年記念誌 昭和60年3月20日
関東実業団バスケットボール連盟
- ・TOKIO MARINE BASKET BALL M60・W40 平成4年4月28日
東京海上火災保険株式会社
- ・「日本鋼管バスケットボール部60年の歩み」 平成11年5月
—天皇杯初優勝から50年—
NKKバスケットボール部OB会
- ・「第一生命バスケットボール部60年の歩み」(1940～1999) 平成11年11月1日
第一生命保険相互会社バスケットボール部
- ・「興銀バスケットボール部史」 昭和57年7月5日
日本興業銀行 行友会バスケットボール部



「実業団バスケット」昭和50年誌 巻頭言



日本実業団連盟設立20年誌 表紙

シニアチーム紹介 シルバーキッズ（兵庫県）

[普及部]

普及部では本誌紙面で全国のシニアチームを紹介しているが、今回は第5回目として“シルバーキッズ”について、チームの生い立ち・歴史などを、磯野和彦世話人から紹介して頂く。

兵庫 シルバーキッズの誕生と、その20年の歩み

2000年（平成12年）11月8日、関西学院大学バスケットボール部超OB達と、同志社大学超OB達が、神戸市三宮の「こうべ市民福祉交流センター」の体育館に集まり交歓試合を行った。

関学OB：武藤、福島、辻、赤峰、赤尾、山口、+ドクターチームの日笠

同大OB：西島、中井、桂、芥川、柴垣、酒井、桜田

試合後の宴席で、満場一致、超OBチーム「シルバーキッズ」が結成された。

リーダーは、福島吉次郎（1930年生まれ、関学一松下電器）、そして会のモットーとして

「いつまでも 少年の心を！」が決まった。

2001年より、福祉センターをホームコートとして、当初は月一回程度の練習を試合形式でやっていたが、次第に参加者も増えた。津田（神戸大学）、山本（神戸市役所）、関学の毛呂、牛尾、谷、西山、山下、関西大OBの坂本、そして元国際審判員の名越（日本伸銅）もレフェリーとして参加する。

このチーム結成当時のメンバーの平均年齢は67歳（最年長が、74歳、最年少が60歳）という‘驚異的な’年齢構成のチームが誕生した。そこで加入資格は「60歳以上の籠球少年」としたのであります。

やはり対外試合を望むシルバーキッズでしたが、同等チームが他にありません。

一計を案じた幹部は、兵庫県協会との人脈を生かして、家庭婦人バスケット界の強豪「FINE」のシニアの方々、西村（ヤシカ）、森本（武庫川女短大）、中田（安城短大）等の名選手に挑戦したのでした。これがきっかけで、シルバーキッズにOG（50歳以上）が続々と加入、レディース（女子部）のチームが2008年に成立しました。

この超OB・OGの混成チームは、たちまち(?)マスコミの注目を浴び、有力紙が次々とシルバーキッズの取材に訪れ、各紙の兵庫版を賑わしました。

はたしてその効果は抜群で、阪神間在住の「日本リーグの超OB」の加入を見たとあります。古田（早稲田大一住友金属）、天摩（明治大一松下電器）、渡辺（明治大）、上野（法政大一住友金属）、谷野（法政大一松下電器）、藤原（同大一松下電器）、阪田（同大一松下電器）の錚々たる面々です。

*** 2019年全国シニアバスケット交歓大会@代々木で活躍する面々



シューター#35 谷野選手



シューター#34 藤原選手

更に特記すべくは、神戸大学OB達です、創設期の津田に始まり、木村、野村（神戸大学教授）、石脇、伊藤、山口、竹厚、芦田、前多、春名、と綿々と続いています。

されど、我がシルバーキッズの創立理念は、「来るものは拒まず（去る者は追わず）」であり、決して「球歴」を重視しているわけではないことは一言申し上げます。

ではこの錚々たる超OB達の集う「シルバーキッズ」の戦績や、いかん？となりますが、これはいかんせん、パットしません。意気揚々と乗り込んだ、「代々木シニアバスケット交歓大会」も、毎年苦戦の連続です。

以下に、今までの主なる活動実績を記します。（勝敗は不問にしましょう）

* 全国シニアバスケット交歓大会@代々木

この大会には、2009年の第2回大会よりお呼びいただき、男子・女子共に連続出場を続けております。2020年はコロナ渦で中止となったのは、誠に残念。

* 「フリーダム」（名古屋市）との、毎年の定期交流交歓試合

2002年から、毎年ホーム/ビジターを交互に、神戸/名古屋で開催しております。今年の第19回大会@神戸は、残念ながら、来年に延期になりました。

* 「横浜カップ」 この大会に2012年の第1回大会から、連続出場しています。

* SKレディスが「ねんりんピック」バスケット大会に毎年参加しております。

* 「海外への遠征」 交歓大会

- 1) 「ハワイ遠征試合、2012年5月、関東勢の参加も得て、ハワイの60歳以上のとの試合、——長身者を揃えた相手に善戦惜敗
あとはオアフ島観光を満喫。
- 2) 「台湾、台北」遠征試合、2019年3月、男子の相手は70歳以上のチーム
しかし完敗、女子は、なんと、元台湾ナショナルチーム、これ又完敗、
交歓会でもカンパイ！あとは、台湾料理と観光を満喫。

* 地元での、毎年のシニア（50歳以上）大会への参加、

- 1) 大阪シニア大会（大阪協会主催）
- 2) 豊中市シニア大会（豊中市協会主催）
- 3) 池田市シニア大会（池田市協会主催）

現在部員は、男子38名（最高齢89歳）、女子18名（最高齢82歳）総勢56名。
ゲームでの得点は負けても、出場選手の年齢では、男女共に、「日本一」を誇っています。

** 文中、各氏の敬称は略させていただきました。そして、創設期メンバーの少なからぬ方々は、いまでは「天国のコート」でバスケットに興じておられます。

文責：磯野和彦





スポーツと障がいのある人達（その3）

ーコロナ禍後のスポーツについてー

上谷 富彦

「スペシャルオリンピックス」（以下SOと書く）の活動に参加している経験からこれまで紙面を通じ「スポーツと障がいのある人達」について書かせていただいた。

2013年に「スポーツ基本法」が改正され「スポーツ庁」が誕生したことは、障がいのある人達にとってスポーツを続けるうえで大きな環境の変化であった。「スポーツ基本法」の目的が「スポーツの振興」から「スポーツを通じた社会の発展」に変わったのである。厚生労働省が所管していた「障害のある人達のスポーツ」は、スポーツ庁の「健康スポーツ課」の中に「障害者スポーツ振興課」が設置され、スポーツという視点から障がいのある人達も日常的にスポーツの出来る環境の整備・充実が進んだ。具体的には東京都では、特別支援学校の体育施設を地域に開放し、SOの活動にも大いに役立ってきた。また、延期された2020年東京オリンピック・パラリンピックの影響も大きかった。メディアを通じていろいろな障がいのある人達がパラリンピック目指し、懸命にスポーツに取り組む姿が大きく報道された。

改めて、障がいがあっても、スポーツに挑戦する姿を社会が認めることへの理解が一段と進んだ。実際、SOに参加して知的障がいのあるアスリート達がスポーツを通じていろいろな人と接し勝利至上主義のスポーツではなく、社会の一員として成長していく姿を体験し、より一層社会がスポーツの持つ力をもっと注目する必要があると感じていた。

このような流れの中、本年の春新型コロナウイルスの世界的感染が発生した。世界中の人々がこれまでの日常生活を大きく変化せざるをえなかった。目に見えないウイルス感染に対して人との接触を避け外出を自粛した。日々感染者の数が発表され、一向に減少の傾向がみられない。感染予防のためSOの活動も中止せざるを得なかったが、10月からプログラムの活動が再開された。

各種のスポーツ団体も活動を自粛したが、プロ・スポーツも無観客でようやく再開できるような状態になった。プロ・スポーツは、エンターテインメントであり、勝敗にこだわりメダルを獲得し、賞金を目的に競技が行われる。多くの観客がいて、一緒に応援し、一体感を持つことが当たり前であった状態から大きく変化したのだ。本来、スポーツは、個人の意思によって生活を楽しむための行動であり、ルールに従い相手を尊重しフェアにプレーをする「スポーツマン・シップ」を学ぶ場であり、たとえ勝敗に敗れても「良い敗者＝グッドルーサー」としてゲームを楽しむことを目指していた。（注1）（注2）

しかし、プロ・スポーツが娯楽として大きな地位をもつとそのスポーツの本質が希薄になっていた。新型コロナの発生によって、改めてスポーツの価値を考えるよい機会となった。

会員だより

日本バスケットボール協会では、2018年からSOと協力して「ユニファイド・バスケットボール競技」に取り組んでいる。障がい者と健常者が一緒にチームをつくり試合を行う。2019年には、SON（SO日本）主催の第1回ユニファイド・バスケットボール大会が開催される予定であったが、残念ながら今年の台風の影響で中止となったが、このような流れは着実に進んでいる。SOにおいても本来のスポーツ団体であることを認識し、本年度より、指導体制において各競技団体との連携を強化する事に決定した。

特にバスケットボール競技は、人気種目でもあり、全国で多くのアスリートが参加している。SOのバスケット競技部会でも、体制を整備し全国的な指導体制の強化を目指している。その一つとして、元アルバルク東京の渡辺拓馬選手に、アブダビ首長国連邦で開催されたSOの夏季世界大会に参加していただき、国際的SOの活動に注目するようにしている。

新型コロナの感染拡大が終息した後、スポーツを通じて障がいのある人達も日常的にバスケットボールを楽しむことが出来る社会の実現に向かって歩みを進めていきたい。

(注1) SOの大会では、次のような内容のアスリート宣誓が行われます。

「わたしたちは、精一杯、力を出して勝利を目指します。
たとえ勝てなくても、頑張る勇気をあたえてください」

(注2) SOの活動に参加しているボランティアの発言

- ・ユニファイド・バスケットボールのイベントでは、試合に勝ちたいと言っていたアスリートが接戦で負けた後、試合から戻ってくる仲間に対して「いい試合だった」と頑張りを讃える様子がありました。
- ・SOの活動では、アスリート一人一人がそれぞれのペースと個性を認め合う様子が見られ、勝ち負けだけではないスポーツの良さや、一生懸命に取り組むことの大切さをあらためて感じる事ができました。

[副会長]

編集部追記

寄稿者の上谷副会長は、公益財団法人スペシャルオリンピックス日本より右のように、2020年10月から2023年3月31日まで、バスケットボール部会のアドバイザーを委嘱されています。



会員だより



リングに向かって“跳べ” 10年後の子供達

その8：富士見市立西中学校男子バスケット部

鈴木 承二

10月30日、埼玉県富士見市立西中学校の男子バスケットボールチーム顧問、鷺尾弘樹先生を訪問した。

当日、川端正則校長先生にもご面談頂きました事、御礼申し上げます。

西中学校が目指す学校像である

「生徒一人一人が 自分の個性を生かし 活躍できる学校」

にふさわしく、

顧問鷺尾先生の指導方針のもと、

- － 1、自主的に考えて行動する、
- － 2、逃げずに積極的にプレーをする

ことが、部員に徹底されている。

この方針を受けて、子供達が主体的に練習を行っているのが印象的であった。



富士見市立西中学校



鷺尾弘樹先生

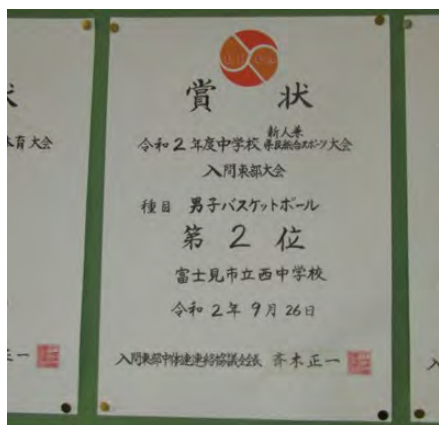
鷺尾先生、学生時代10年間のバスケット歴：

- ・埼玉県富士見市立富士見台中学校
- ・埼玉県立志木高等学校
- ・城西大学経済学部

会員だより

西中学校のバスケット戦歴

- ・令和元年（2019年）度 学校総合体育大会—入間東部地区大会、優勝
県大会ベスト16位
- ・令和元年（2019年）度 新人兼県民総合体育大会—入間東部地区大会、優勝
県大会出場
- ・令和2年（2020年）度 学校総合体育大会—新型コロナ拡大防止処置の為大会中止
- ・令和2年（2020年）度 新人兼県民総合体育大会—入間東部地区大会準優勝
*（入間東部地域は富士見市、ふじみ野市、三芳町を範囲とした、男子14チーム、
女子15チーム）



入間東部地区大会準優勝の賞状



校内ロビーの入賞櫃・トロフィー

コロナの影響もあり、限られた短い時間でテキパキと自主的に練習が進んでいる。

男子部員は28名（1年生12名・2年生16名）で、体育館を使用できる日は、体育館でチームプレー主体の練習。体育館が使えない日は、校庭（外コート）での体力作りや基本練習を行っている。

** 鷲尾先生の指導のもと、自主性を生かした子供達がこの先のバスケットボール界を背負うリーダーになってくれる事に期待したい。

[理事・普及部部长]

高校籠球ふるさと記（静岡県編）

[事務局]

静岡県のバスケットの歴史を語る場合、最初に思い浮かぶのは県バスケットボール協会である。1947年に設立され、本年で74周年を迎え、現在もバスケットの普及・発展のために活動している。協会設立と同じ年の戦後初の女子全日本選手権で、戦前の静岡精華高女を主体とする静岡精華倶楽部が準優勝を飾り、これがその後の県のバスケット界発展の大きな礎となった。協会設立の3年後の1950年には、巧みなドリブルや速攻のロングパス、ワンハンドショットで日本のバスケット界を唖然とさせた日系2世のハワイA J Aチームが公式戦を終えて静岡を訪ねた。その機会に、全静岡と親善試合を行った。全静岡は、静岡商OBの北松、長谷川、清水東OBの現姓内田の沢野、東京教育大OBの馬渡らに早稲田大OBの石田が加わっての熱戦で敗戦はしたが、この経験は県のバスケット界にとっても大きな収穫となった。

このような歴史と伝統を誇る静岡県のバスケットであるが、本誌では1947年（昭和22年）から1988年（昭和63年）迄を対象にしたい。その間、県内で活躍した高校や選手、コーチ・指導者、更には当時の審判員や協会関係者にも焦点を当て、静岡県のバスケット界を通観してみる。内容的には静岡県バスケットボール協会創立40周年、50周年、60周年記念誌の他、客観的な資料に依拠し、まとめたつもりであるが、抜けや思い違いがあるかもしれない点、読者の皆様からのご指摘をお待ちしたい。（なお、個人名は敬称略、女性は旧姓）

因みに、高体連は、48年の新制高校の発足と共に、全国的にでき、種目ごとに専門部という名称でスタートしたが、静岡県では馬渡猛が初代部長として運営に当たった。

ところで、静岡県にとって最も充実していた時期は1955年頃から1970年頃までであるが、ここではその前後も含め、男女別にもう少し詳細に記してみたい。（選手の卒業校名の後の数字は西暦卒年、学校名は最初を除き略称）

先ずは、男子であるが、大きくは4つの期間に分けることが出来る。

第一期（1947年—54年）

この時期、強かったのは年代順には清水東高校、静岡商業高校、浜松商業高校、静岡高校であるが、インターハイでは1、2回戦どまりで目立った戦績は挙げていない。53年の香川国体には静岡が東海代表で出場しているが、1回戦で敗退している。

第二期（1955年—64年）

静岡がインターハイに8回出場、準優勝2回（58年仙台、59年熊本）、ベスト8を3回（60年福井、61年青森、64年静岡）の成績を上げ、国体には6回出場し、優勝1回（61年秋田）、準優勝1回（60年熊本）、第3位を1回（59年東京）と全国に静岡の名を轟かせた。52年に赴任の名将・馬渡の厳しい指導と、大学で活躍しているOBが帰静時、母校に立ち寄って実践的指導を行うといった良き伝統、それらに応えた選手達の頑張りの成果ともいえよう。

この期間の著名選手としては、木内（旧姓増田）（静岡59 - 慶応義塾大 - 住友金属：大学2年時に最年少でローマオリンピックに日本代表で出場、東京オリンピックでは中心選手として活躍）、栗野（静岡61 - 東京教育大 - 日本鋼管：東京オリンピック候補、ユニバーシアード65、67年ユニバーシアード出場、70年アジア大会日本代表）、安達（静岡61 - 東教大 - 八幡製鐵：東京オリンピック候補、シャンソン化粧品監督、）らがいる。

因みに木内は県協会理事、理事長を歴任、日本協会専務理事も歴任。

同じく安達は、日本協会理事を歴任、WJBL立ち上げにも関与。

また、この期間に活躍した選手としては、川崎（静岡 56 - 東教大 - 静岡県教員）、鈴木（静岡 56 - 東京大 - 静岡県教員：静岡高校コーチ）、杉山（静岡 57 - 学習院大）、落合（市立静岡 57 - 日本体育大 - 静岡県教員）、石野（静岡 58 - 静岡薬大）、桑原（静岡 58 - 同志社大 - 積水化学）、寺尾（静岡 58 - ）、寺田（静岡 58 - 静岡薬大）、馬場（静岡 58 - ）、林（静岡 58 - 早大 - 日本伸銅）、桜田（静岡 59 - 同志社大 - 松下電器）、永田（静岡 59 - 同志社大）、野村（静岡 59 - ）、今村（静岡 60 - 東教大 - 日本鉱業）、竹原（静岡 60 - 東教大 - 静岡県教員）、塩津（静岡 60 - 慶大）、竹中（沼津商業 60 - 同志社大）、住谷（静岡 61 - 慶大 - 積水化学）、牧野（静岡 61 - 明治大）、渡仲（静岡 62 - 同志社大）、土屋（静岡 62 - 同志社大）、長田（静岡 62 - 同志社大）、佐橋（静岡 62 - 慈恵医大）、寺本（静岡 62 - 東教大 - ）、松岡（静岡 62 - 慶大 - ）、佐藤（静岡 62 - 慶大 - 三洋貿易）、古谷（静岡 65 - 慶大 - 東京海上）らがいる。

第三期（1965年—74年）

65年からの5年間は浜松商業の全国レベルでの活躍が特筆できる。65年の長崎インターハイでの第3位、同じく岐阜国体で準優勝、67年の金沢インターハイでの第3位、68年の広島インターハイでの第3位、69年の宇都宮インターハイでの準優勝、70年の和歌山インターハイでの第4位、74年の全国選抜大会に東海地区代表として初出場。69年の長崎国体では日大三島と浜松商業の全静岡が能代工業を破り優勝。これらは、まさに名将・坂田監督の厳しい指導が見事に結実した結果といえよう。この間、65年、68年には古豪の静岡もインターハイに出場している。その後、浜松商業に次いで台頭してきたのが日大三島、インターハイに4回出場し、69年の長崎国体では全静岡として優勝している。この期間の著名選手としては、丸尾（静岡 67 - 慶大 - 住友金属：ユニバーシアード代表）、尾鷲（日大三島 70 - 日本大 - 日本鉱業：大学4年次に大学日本1位、MVP獲得、アジア大会にも出場）、青木（日大三島 71 - 早稲田大 - 日本鉱業：アジア大会に出場）がいる。因みに丸尾の日本協会副会長在任中の急逝が惜まれる。

また、この期間に活躍した選手には、松戸（日大三島 68 - 日本体育大 - 熊谷組）、滝（日大三島 68 - 日大 - 大和証券）、杉山（浜商 69 - 中央大 - 住友金属）、杉浦（浜松西 69 - 早大 - 三菱電機）、小長谷（清水南 69 - 青山学院大）、森本（静岡 68 - 青学大）、久保（静岡 69 - 東教大 - 東海大コーチ）、深津（静岡 69 - 慶大）、殿岡（静岡 70 - 慶大）、西川（浜商 70 - ）、疋田（浜商 70 - 中大）、大田（静岡 71 - 芝浦工業大）、館石（浜商 71 - 中大）、三宅（浜商 71 - ）、笠井（清水南 72 - 日体大）、土屋（韮山 74：国体選抜選手 - 筑波大）、鈴木（浜松西 75 - 筑波大）、海老沼（富士宮北 75 - 京都産業大 - 三井生命）らがいる。因みに殿岡（静岡 70）と笠井（清水南 72）は、現在、県バスケットボール協会副会長を、土屋（韮山 74）は専務理事を務めている。

第四期（1975年—88年）

常勝の浜松商業に加え、浜松西が76、80、81年とインターハイに出場、85年には古豪の静岡が久しぶりに七尾インターハイに出場している。又、80年以降は、浜松西に加え、興誠高校と沼津学園の両私学の活躍が目立ってきた。特に興誠高校は母校出身の石川監督の指導の下、徐々に力をつけ、全国レベルの選手も輩出した。

この期間の著名選手としては、辻村（興誠 84 - 日体大 - 三菱電機：ユーゴスラビアのユニバーシアード出場、北京アジア大会日本代表）、後藤（89 - 日体大 - 三菱電機 - NKK：広島アジア大会日本代表）らがいる。

また、この期間に活躍した選手には、牛田（浜商 77 - 中大）、檜垣（静岡 79 - 筑波大）

インカレ準優勝、関東大学選抜選手)、広瀬(沼津東 80 - 早大)、中村(浜商 81 - 拓殖大)、五明(浜商 86 - 東海大)、田中(静岡 86 - 筑波大(医))、藤田(浜商 87 - 大阪商業大)、杉山(藤枝南 87 年 - 日体大)らがいる。

因みに、田中(静岡 86)は筑波大進学後も選手として活躍。現在、県協会理事を務め、日本スポーツ協会公認スポーツドクターでもある。時代は下るが、山本(静岡 94)が愛媛大医学部卒業後、田中同様、公認スポーツドクターとして国際大会出場の日本チームに帯同している。

次に女子であるが、大きくは3つの期間に分けることができる。

第一期(1947年—62年)

戦前の静岡精華高女の伝統を受け継ぐ静岡精華が石田コーチ(48—58年)、佐藤コーチ(59年以降)の指導の下、全国レベルで大活躍、インターハイでは準優勝が3回(56、57、60年)、第3位が3回(54、58、61年)、国体では優勝が2回(56、62年)、準優勝が1回(57年)、第3位が3回(55、58、59年)とその名を全国に轟かした。静岡英和も60年、62年とインターハイでベスト8に進出している。

この時期の著名選手としては、太田(西遠女子学園 61 - 三菱電機名古屋)と古田(西遠女子学園 61 - 三菱電機名古屋)がいる。ともに64年ペルーで開催の世界女子選手権に日本代表で出場。太田は65年の女子アジア選手権でも日本代表で出場し、ベスト5に選ばれている。

この時期に活躍した選手としては、静岡精華の神戸国体優勝(56年)メンバーの西脇、石川、斉藤、池田、増田(因みに、斉藤は翌年の静岡国体の開会式で選手宣誓を行い、主将として準優勝を飾った)がいる。同じく、岡山国体優勝(62年)メンバーの斉藤(要)、斉藤(雅)、伏見、滝波、鈴木、今村らがいる。因みに鈴木は佐藤コーチの勧めもあり、シャンソン化粧品に就職、6年間、現役プレイヤーとして日本リーグやオール・ジャパンで活躍した。

第二期(1963年—76年)

静岡精華に加え、清水西の活躍が目覚ましく、65年から71年、73年、74年とインターハイに出場している。65年の岐阜国体では第3位の成績を収めている。静岡精華、静岡女子商業、清水女子校もそれぞれインターハイに出場している。

この時期の著名選手としては、天野(静岡市立高 74 - 第一勧銀)と森下(静岡精華 77 - 第一勧銀)がいる。ともに日本リーグ、全日本総合選手権で優勝の経験を持ち、天野は日本代表として78年の女子アジア選手権に出場、森下も日本代表として78年、82年の女子アジア選手権に出場している。

この時期に活躍した選手としては、青木、稲葉、宮城島(いずれも清水西 66 - 日本通運)らがいる。

第三期(1977年—88年)

この期は、清水西に変わり、市立沼津を中心に、静岡精華、浜松南、浜松湖東が競い合う時代が到来。特に市立沼津が、82年の全国選抜でベスト8、88年の3月大会ではベスト4、12月大会では第3位と輝かしい戦績を挙げているのが特筆できる。

<コーチ・指導者>

- ・馬渡 猛 鹿児島県加治木中学卒業後、東京高等師範へ進学、バスケット部で活躍、卒業後は、静岡県の高校に社会科教師として赴任し、県のバスケットに多大な影響を与えた。52年から11年間、静岡高校の教員としてチームを指導、この間、インタ

ーハイに6回（準優勝2回）、国体に5回（優勝、準優勝、3位各1回）出場した。特に61年の秋田国体での優勝は静岡高校の全盛時代の頂点といえよう。この間、木内（旧姓増田59 - 慶応大 - 住友金属）、栗野（61 - 東京教育大 - 日本鋼管）安達（61 - 東京教育大 - 八幡製鐵）といった名選手を育てた。当時、理論と厳しさの馬渡バスケットと呼ばれた。馬渡の厳しさについては、こんな逸話も残されている。元テレビ東京で永くバスケット担当として取材してきた寺尾氏のコメントである。（当財団季刊誌バスケットボールプラザ20号—2003年に掲載、因みに同氏は静岡高校野球部出身）「雨の日、野球部は体育館でバットのスイングをよくやった。その際、バットを忘れることがあった。翌日、友人の今村君（東京教育大 - 日本鉱業）から、バットを忘れちゃ困るじゃないかと文句を言われたので、わけを聞いてみると、馬渡先生にそのバットで叩かれたのだという。“手を上げろ！手を上げろ！”とディフェンス練習で大声を上げる先生。外部の我々も身が引き締まる練習風景には鬼気迫るものがあった」と。

- ・ **坂田勝利** 日本体育大卒、51年に浜松商業の教員になり、バスケットは素人であったが、学校からの要請で指導開始、正月や盆もなく練習に明け暮れた。その結果、79年、転任するまでにインターハイに14回出場し、うち5回がベスト4という輝かしい戦績をもたらした。又、69年の長崎国体では浜松商業・日大三島の混成チームの監督としてチームを優勝に導いた。当時、「根性と走り」の坂田バスケットと呼ばれ、「理論と厳しさ」の馬渡バスケットと並び称せられた。
- ・ **野口太弥** 戦後すぐ、清水東高校の監督になり、16年間指導。49、50年の国体に出場、51年にはインターハイに出場されるなど同校の黄金時代を作り上げた。
- ・ **石田正一** 早稲田大時代に選手として活躍、静岡新聞入社後、48年から静岡精華高校のコーチに就任、インターハイ6回、国体7回出場させ、神戸国体では優勝をもたらした。吉井四朗とピートニューエルの理論の影響を受け、それを取り入れた。安城短大（現愛知学泉大）に移ってからユニバーシアード東京大会の女子監督として日本チームに銀メダルをもたらした。
- ・ **川崎健三** 静岡高校、東京教育大で活躍、61年に赴任した清水西高校では女子チームを10回インターハイに出場させ、その指導力は高く評価されている。65年の岐阜国体では3位入賞を果たした。生徒にバスケットを如何にして好きにさせるかに腐心し、技術面ではシュートを重視した。
- ・ **佐藤政弘** 東京教育大卒業後、静岡精華高校に奉職して選手の育成に努め、4年目の62年の岡山国体優勝をはじめ、インターハイでも好成績を上げた。
- ・ **小池義之助** 東京教育大卒、56年静岡女子商業高校に赴任、大学時代は元日本鋼管の糸山の1年後輩で期待されたが病気がちで、4年になって自ら一軍入りを辞退したというエピソードの持ち主。その指導方法はユニークで「バスケ部員である前に女子高生であれ」、「練習に当たっては、極限生活の日常化を」といった標語を掲げ、生徒を指導し、同校を当時、全盛を極めていた静岡精華高校に追いつくまでになった。当大会準優勝3回、インターハイは5回出場（最高はベスト16）高校をハイレベルにするには、まずは底辺拡充、ミニバスン普及にも尽力した。
- ・ **大石 功** 42年生まれ、浜松商業から日体大に進学、最初の赴任校清水南高校では6年目に東海大会優勝、インターハイ出場を果たした。その後、浜松西高校異動後は打倒浜松商業を目指し、自らもUCLAに出向きコーチ理論を学び、浜松西高の躍進に貢献。馬渡と坂田の「信念と勇気」をもって生徒指導に当たる姿勢を引き継いでいる。
- ・ **石川友康** 43年生まれ、浜松興誠高校から日体大に進学、卒業後、母校に赴任、バスケット部の監督として生徒を指導。81年から3年連続、85年から4年連続、全国選抜

大会に出場、5回ベスト8にまで進出。辻村、後藤といった著名選手を育て上げた。

- ・大橋治人 日大三島高校バスケット部の監督として55年頃より着実に実力をつけ、65年代には当時全盛の浜松商業と競い合うまでになった。69年の長崎国体では、浜松商業・日大三島の混成チームを監督として優勝に導いた。
後に全日本選手として活躍する尾鷲（-日体大）や青木（早稲田大）を育てた。
- ・榎本行宏 55年より一貫して、浜松市立高女子部を指導、この間、熱心な指導でチームをインターハイに6回、全国選抜に7回出場、84年には全国選抜でベスト8まで導いた。
- ・青木良浩 市立沼津高女子部をそのカリスマ的な指導力により、チームをインターハイで19回、全国選抜で11回の出場に導いた。82年の全国選抜では、ベスト8、88年の3月大会ではベスト4、12月大会では第3位と輝かしい戦績を収めている。97年に静岡商業に転任後も同高女子部を指導。

<審判員>

- ・香中亮一

早稲田大卒業後、55年に地元の大昭和製紙女子部の監督に就任、同年開催の神奈川県国体でチームを優勝に導いた。チーム作りと同時に行ったのが、県の審判レベルの向上。馬渡の依頼を受けて県協会でも最初の審判委員長を受け、県内審判の技術向上に尽力。国際審判員として東京、メキシコ、モントリオールオリンピック大会で審判を務めた。

<協会関係者>

- ・村上芳郎 初代会長（49年—50年）

少壮実業家として、スポーツに対する厳しい見方で協会の基礎作りを行った。

- ・吉岡 栄 第2代会長（51年—53年）

協会創業苦難の時期に県下チーム、特に高校の充実を力説、また国体の静岡誘致にも尽力。

- ・中村満男 第3代会長（54年—57年）

戦前、全国大会で活躍した静岡精華高女のバスケット部の育ての親、49年から5年間は理事長として協会を纏め、54年に会長就任後は57年の静岡国体を成功に導いた。

- ・川村 弘 第4代会長（58年—72年）

地元シャンソン化粧品社の社長として数々の要職をかねているなか、県バスケット協会発展のために援助を惜しまず、また積極的な強化策の導入や国際試合の誘致に努め、バスケット王国静岡の名をほしいままにした。在任中の急逝が惜しまれる。

- ・塩原保六 第5代会長（73年—75年）

戦前、立教大学の名プレイヤー（旧姓 剣持）、30年の極東大会に日本代表として出場。51年から清水市に在住、地元のバスケットの発展に貢献されるとともに、県協会の理事長（54年—59年）、副会長（60年—72年）として中村と川村を補佐、会長就任後は協会最長老として後輩を指導。

- ・川村荘太郎 第6代会長（76年—81年）

静岡商業から早稲田大で選手として活躍、戦前の静岡精華高女をコーチするなど指導者としても非凡ぶりを発揮。戦後は協会設立に奔走、その後、理事長（60年—67年）、副会長（68年—75年）として活躍。理事長時代にはインターハイと国体を手掛け、副会長、会長時代には数々の国際大会、全国大会誘致を成功させた。静岡に生まれ育ち、バスケットボールをこよなく愛した。

- ・馬渡 猛 第7代会長（82年—83年）
 県高体連バスケット部長として20年間、数多い県の指導者を纏め、県協会では理事長（68年—73年）、副会長（74年—81年）、会長（82年—83年）を歴任、57年の静岡国体、64年のインターハイを誘致。75年に県立島田高校校長を最後に退職、日本協会の事務局長も務めた。
- ・川村 修 第8代会長（84年—）（株）シャンソン化粧品社長
 地元シャンソン化粧品の社長として数々の要職をかねているなか、県バスケット協会発展のために尽力。
- ・加藤 覚（旧制成蹊高校—京大 45年卒）
 51年、県内都市対抗戦の帰路、馬渡と会ったことがきっかけで、県内西部地区の強化（“打倒中部”）に尽力、その発展に寄与。そのためには、中・高・社会人が一体となって運営することが必要と考え、関係者と協力して西部バスケットボール協会を結成した。51年—53年、60年—65年 県協会理事。
 戦中、多くの部員が学徒動員で戦地に赴く中、残された理系学生として京都大の伝統の灯を絶やさないために尽力した。上記対抗戦で大学の先輩やライバルに出会ったことが引き金となり、消えかかっていたバスケットへの情熱が再燃したのかもしれない。
- ・漆畑智生 静岡商業OB、市役所勤務の傍ら、後輩の指導とともにバスケット教室の開催に注力し、また、ミニバスケットの強化・普及に努め、後の名選手を育て上げるとともに、多くのバスケット愛好者も育てた。
 68年からは静岡市バスケット協会理事長、72年から足掛け25年県協会の理事として活躍、76年から78年まで副理事長、79年、80年は理事長の要職を歴任、県バスケット界を牽引した。

編集後記

私事に亘るが、老生の高校時代は63から65年、兵庫県下某高校のバスケット部に所属したが、監督からよく聞かされたのが、馬渡先生の静岡高校と畑先生の武蔵高校のこと。そんなこともあり、当時から、静岡県の男子バスケットには憧れと、畏敬の念を持っていたが、今般、同県バスケットの資料を渉猟するなかで、その強さの背景を改めて思い知った。私見では、以下の3つに集約できる。

- ・馬渡先生の存在
- ・静岡高校と浜松商業高校の存在（監督・コーチ、OB、現役）
- ・静岡県教員チームの存在（県内高校出身者が大学で活躍後、地元中・高の教員としてバスケット指導をしながら教員チームとして、強力なチームを結成、そのことが、全体としてのレベルアップにつながっている）

最後になるが、今回、本稿をまとめるにあたり、静岡高校バスケット部OBの古谷直樹氏と殿岡裕規氏（静岡県協会副会長）のお二人には、資料提供他で大変お世話になった。紙面を借りて謝意を表したい。

神田バスケットボール資料室（2020年12月）

[事務局]

日本バスケットボール振興会は、過去に発行された団体・出版物のほか、日本のバスケットボールの歴史を伝える貴重な資料・記録などを【先人の軌跡】として収集・整理・保管し閲覧可能にしています。過去のことを考え極め、現在および未来のことを考える資料として後世に伝えることを目的とした活動です。

前回、神田バスケットボール資料室が所蔵している現在までに発行されたバスケットボールの専門誌・機関誌が中心でした。今回は資料室に保管している国際大会の「大会報告書」を紹介し、オリンピック大会の報告書内容（目標・報告者・今後の課題など）を報告します。

1. 第15回オリンピック大会報告書（1952・ヘルシンキ）

オリンピックに参加する予定で進めていた各競技団体は、1951年（昭26）12月20日に開催されたNOC（JOC）の第12回国際委員会で「国庫補助金」の問題で査定された金額に基づく員数（各団体の役員・選手数）があり、結果外貨を定めるときの員数として認めるとされ政府が外貨枠（増加）を認めない場合は、NOCとしては努力をするが、結果的には従わざるを得ないと報告された。競技団体を代表して各委員は、希望の状況を発言している。

バスケットボールは、土肥冬男委員が「来日したハワイ2世チームに全敗、アジア大会では、フィリッピンに1敗のみ、その後米国コーチの指導により実力は向上した。更に明年2月PALチーム（フィリッピン実業団優勝チーム）を招聘するが、之により国際水準がわかる。若し好成績ならばベスト6位～8位に入る。選手12、審判1、監督1、計14名」と発言している。

翌年1月20日に開催された第13回国際委員会で、（1）道具のいる種目、（2）チームゲームは絶対にチャンスのあるもののみ考慮するとされ、（1）、（2）の条項により「ホッケー」、「蹴球」、「馬術」、「バスケットボール」が未参加団体とされ、「視察員」1名のみが認められた。

報告者 視察員「土肥冬男」

【旅程】6月19日に羽田発、途中スイス・ジュネーブで選手一行と別れ22日、23日両日ベルンのFIBA本部で日本から提出する規則改正案について打ち合わせを行った。ドイツ、ベルギー、オランダ、デンマーク、スエーデンに立ち寄り、7月7日、目的地ヘルシンキ着オリンピック村に入る。約1ヶ月同地に滞在、帰路は8月6日ヘルシンキ発一路南下してドイツに入り、さらにイギリス、フランスに数日過ごして後、スペインに渡りイタリアに出てPAL機を利用して一路マニラに飛ぶ。8月28日早朝マニラ着、第2回アジア大会の会場を視察、同夜レストン大学対ホセ・リザール大学の試合を見て28日深夜マニラ発、29日羽田着。



【感想】本大会を観戦して世界に大体4つの型のバスケットボールがあることを知った。第1は、アメリカを中心とした言わば正統派とも言うべきものでカナダ、フィリッピン、キューバ、メキシコ、イスラエル等（日本も含まれる）第2は、南米諸国のラフでスピードを貴ぶ。ウルガイ、アルゼンチン、ブラジル、チリー等。第3は、欧州派であって、技にたのみ力が足りない。フランス、スペイン、エジプト、イタリア、スイス、トルコ、ギリシャ。第4は、ソ連圏諸国スタイルとしては欧州諸国に似てはいるが一般にプレイがきれいでスピードもあり且つ体力にすぐれていた。日本が若し参加していたらフィリッピン代表チームの成績から推察すると日本の実力は予選通過が精いっぱいというところであろうかと語っている。

国際試合のたびごとに痛切に感じるのは日本チームの体力の不足である。今後日本のバスケットボールも依然として技術のみにたよることなく、力のバスケットボールを強行する日の必要を痛感した。

【国際ルールの問題】国際ルールとアメリカンルールの相違点については、国際ルールによって大会が行われた。大きな相違点は、第1に3秒ルール、第2にドリブルに移る際の制限などがありFIBAの規則委員会でも改正動議が取り上げられたが、次回メルボルン大会も国際ルールを採用することになった。土肥個人としてはアメリカンルールを採用すべきであると述べている。女子委員会では、次のオリンピック大会に女子競技の開催を決定しIOCに正式提案することとなった。

2. 第16回オリンピック大会報告書（1956・メルボルン）

報告者 コーチ 前田昌保

1955年に日本の実力を国際的に評価すべき試合の資料がないので、オリンピック参加決定のためにはそのデータを作る必要に迫られた。従って、1954年ブラジルで行われた世界選手権第3位となったアジアの最強国フィリッピン代表チームを招待し、その対戦成績を基準とすることになった。結局フィリッピンとの試合は1勝2敗に終わったのであるが2敗とも1点差の実力伯仲のゲームであったことと、世界バスケットボール連盟に照会した結果、16カ国以上場合は、本大会開始に先立ち16カ国に絞るための予選に日本がシードされることが判明したので、7月によく正式参加が決定した。

【強化練習】外国選手に劣る点の強化とアメリカのプレイの影響で、当たりの弱い日本のプレイは国際ルールのもとで行われるオリンピック大会では通用しないのでオリンピック向けの体力と鋭さ、激しさを持たせることを重点に強化練習を行った。9月末に役員2名、糸山主将を含む12名合計14名の派遣団を決定した。その後在日米軍との試合を中心に数多くの試合を行った。参加国16カ国予定のところイスラエルが国際情勢の悪化で不参加となり15カ国となり、日本は、7戦3勝4敗の10位となった。

【今後の課題】アメリカ、カナダを除いては、アジア大会の再現で、身長、体力とも大差なく日本の技術を出すことが出来るがアメリカとカナダのごとく今大会参加中最も身長の高いチームとの試合は、身長の差が敗因の全てであると言える。従って素晴らしい技術を持った長身プレイヤーを求めることはここ当分無理であるから体力のある激しいプレイの出来る選手の養成とシュート力の向上が当面の急務であると痛感すると報告している。

3. 第17回オリンピック大会報告書（1960・ローマ）

【参加準備】アジアからは、日本とフィリッピンの参加が認められた。他にシードされた国は、メルボルン大会の上位国と世界選手権および各地域の優勝チームならびに主催国の

イタリア、残りをボロニアで行われる予選（18カ国参加）を経て5カ国が選出される。

日本は、第3回アジア大会でフィリピン、台湾、日本がそれぞれ3勝1敗の三つ巴となり、結果得失差アベレージにより、フィリピン、台湾、日本の順位となったが、フィリピンは、メルボルン大会の7位で優先的にシードされ、日本と台湾は、メルボルン大会とアジア大会の成績を総合的に考慮し日本が代表国として選出された。

【代表決定の経緯と強化】選出の基本条件(a)自己の持つ技術を最高度に発揮できる体力、気力ともにたくましい土性骨のある選手、(b)技術的考慮も勘案して長身者を優先、(c)シュート力のあり、基礎技術を十分身に着けたボールのキープ力があり、かつ激しいプレイの出来る選手、この条件を考慮し（長身選手）、（長身グループ）、（オールラウンド・プレイヤー）、（リード・オフ・マン）、（特長ある選手）の分類を設けて選考した。

【今後の課題】従来の考え方は、日本人は、結局欧米の選手に身長・体格でかなわないので、長身者に出来ない足でかせぐプレイをその身上とすることに考え方が集中されていたが、いずれにしても高いゴールにシュートしなければならないので長身者にゴール下で頑張られるとせつかくそれまでの好プレイが生きてこない。長身者として自分の身長を最高度に生かすプレイ、特にゴールの上のリバウンド・プレイを身につけることである。従来のただボールを回しチャンスを待つ横上がり空転するプレイでなく、一人々々が積極的にディフェンスに仕かけてゴールへの最短距離を行くプレイに大改革する必要が急務と考え、次世代の選手層を集めて常時ナショナル・チームを編成して強化する事の必要を痛感している。

4. 第18回オリンピック大会報告書（1964・東京）

報告者 吉井四郎

【強化方針】(a)大型新人選手の発掘と育成、(b)既成選手の大型コンバート

【試合経過】Aグループで3勝4敗の6位で順位決定戦へ、9戦して結果4勝5敗16チーム中10位。技術の熟練と、基礎体力の増強の面に、大きな成果を挙げ得なかった日本チームの現状では、世界の強豪に相手にして勝ち得る限界がここにあった。

【将来への対策】(A)ナショナルチームの存続、(B)国際交流の必要、(C)コーチング・スタッフの拡大と、その継続性について、(D)一般のレベル・アップ、などが必要であると報告している。



5. 第19回オリンピック競技大会報告書（1968・メキシコシティ）

報告者 国際審判員 香中亮一

残念ながら日本チームは、1967年のABC（アジア・バスケットボール選手権大会）において韓国、フィリピンに敗れ、メキシコ大会に参加できなかった。日本の代表審判員として大会競技役員の資格で香中が参加した。(イ)プレイヤーの体格が東京大会に比べて平均して大きくなった、(ロ)2m級のプレイヤーはもちろんのこと1.8m級のプレイヤーでもジャンプ力が増し、プレーの幅が多彩になっている、(ハ)長身者でもスピードが増している、(ニ)全般的にディフェンスの激しさが一段と強まっている、などの内容を報告書にまとめている。

6. 第20回オリンピック競技大会報告書（1972・ミュンヘン）

報告者 笠原成元、吉田正彦

【強化】メキシコ大会に参加できず、昭和45年に新ナショナルチームを結成、コーチに笠原成元氏を決定、ABC大会を目標としてユニバーシアード、アジア大会、アメリカ遠征と、3つの柱をスケジュールに計画した結果ABC大会を優勝した。47年2月アシスタントコーチとして新たに吉田正彦氏を加えチェコスロバキアとの交流を計り、選手の決定をした。(1)長身者、(2)シューター、(3)長身者、シューターであっても、トレーニングによつて向上する可能性のない選手ははずした。

【結果と反省】予選ラウンドでチェコ、エジプト、オーストラリア、スペイン、ブラジルに勝って5勝2敗で5～8位決定戦に入ることを目算としていたが、Aグループで1勝しかできなかった。決勝ラウンドを経て、2勝7敗の結果、順位はチーム中14位。今大会を反省し、今後の問題として技術的には、持久力、スピード、ボディコントロール、ビジョンを基にしたドリブルワーク、パスワーク、シュートを考えねばならない。また、メキシコ大会の不出場などでナショナルチームのブランクは最低保証であった守りについての伝わりが切れてしまったと反省している。

最後にテロで亡くなったイスラエル選手団の死去者に対して心から哀悼の意を表すると報告書で語っている。



7. 第21回オリンピック競技大会報告書（1976・モントリオール）

男子チーム報告者 吉田正彦

【強化】(1)長身選手の開発と重点強化を目標と平均身長がミュンヘン大会より3cm上回る190.3cmとなった。(2)精神面の強化として、自己の管理ができチームを意識し協調性を持つと同時にチームを有利な方向に向けるために自己の努力、忍耐を惜しまないという心が選手の最も重要な要素として代表選手の条件であることを選手選考とした。

【結果と反省】参加12チーム中11位、エジプトチームに不戦勝のみの結果。2m選手を5人いないと難しい。6位以上のチームは5人以上2m選手がいる。今大会は、アメリカ型、ヨーロッパ型、南米型の3つの代表的バスケットのパターンに大別されるが、南米型は、姿を消したという感じが強かった。日本の主力選手は若年層が多く次のモスクワ大会がピークで力を出し切れる選手が多い。従って勝つためには一人でも多く2m選手を発掘することであると考えると報告している。

女子チーム報告者 尾崎正敏

【大会対策】女子のバスケットボール競技は、モントリオール大会から新たな種目として加えられた。参加国は、昨年行われた世界選手権における上位3チーム（ソ連、日本、チェコ）とホスト国カナダに加えオリンピック予選で選ばれた上位2チーム（アメリカ、ブルガリア）の6カ国。1次合宿から9次合宿まで約100日間の合同合宿を行った。攻撃面では、オールラウンドコンビネーションオフェンスに重点を置き、防御面では、世界選手



権で日本勝利のきっかけを作った防御体形（主力オールコートマンツーマンディフェンス 80%、補助、忍者ディフェンス 20%）を若干修正した。

【試合経過】第1戦は、アメリカ戦 84 対 71 で勝利、第2戦は、カナダ戦に勝利したが、第3戦は、チェコ戦に日本は最悪状態で敗退、第4戦のブルガリア戦は3点差で敗戦、第5戦は、ソ連に23点差で敗退し2勝3敗で結果5位、ソ連、アメリカ、ブルガリアの順位で非常に残念な結果であった。

【反省】ソ連チームを除いて2位から5位までは紙一重の実力伯仲、5位で終わったことは局面局面におけるプレイ上の今ひとつの踏ん張り方の足りなさも指摘されるが、それは選手を育て、チームを作った、指導者たる私一人の責任であり、むしろ、このチビっ子集団が、良く健闘した。本当にご苦労さんとねぎらいの言葉を述べてやりたい。とにかく女子バスケの1ページを作ることが出来なかった点、お詫び致し、報告にかえさせていただきますと語っている。

8. 第23回オリンピック競技大会報告書（1980・ロサンゼルス）

視察報告者 小浜元孝

優勝したアメリカチームをはじめとして出場した上位チームの特徴を分析し、このデータを、時間をかけて検討し今後の方針を立てていきたいと報告している。

その他に下記の国際大会がある。

第24回オリンピック競技大会報告書（1988・ソウル）

第25回オリンピック競技大会報告書（1992・バルセロナ）

・アジア競技大会報告書

第2回（1954・マニラ） 第3回（1958・東京） 第4回（1962・ジャカルタ）

第5回（1966・バンコク） 第7回（1974・テヘラン） 第8回（1978・バンコク）

第9回（1982・ニューデリー） 第10回（1986・ソウル） 第11回（1990・北京）

第12回（1994・広島） 第17回（2014・仁川）

・AJIAN BASKETBALL CONFEDERATION 1960-1985

・ユニバーシアード競技大会報告書

1965 夏季/1966（ブタベスト） 1967 夏季/1968年（東京）

1973（モスクワ） 1977（ソフィア） 1979（メキシコシティー）

1983（エドモントン） 1985（神戸） 1991（シェフィールド）

1993（バッファロー） 1995（福岡） 1997（シチリア）

・東アジア競技大会

第1回（1993・上海）、 第4回（2005・マカオ）、 第5回（2009・香港）

第17回（仁川）

・ユースオリンピック競技大会

第2回（2018・ブエノスアイレス）

以上

事務局だより

[事務局]

- ◇ 「シニアバスケットボール交歓大会 in YOYOGI」は、継続して代々木第二体育館で開催することを原則として考えています。プラザ 87 号で報告しましたが、(東京五輪開催の影響などの理由により) 10/31 付けで令和 4 年 2 月 3 日 (木)、4 日 (金) の両日代々木第二体育館貸出し許可の正式回答を得ました。
また、次回から大会名を「代々木シニアバスケットボール交歓大会」と変更します。
代々木シニアバスケットボール交歓大会 開催日 2022 年 2 月 3 日 (木)、4 日 (金)

- ◇ 「神田バスケットボール資料室」の更なる充実を図るべく、資料の整理を行っています。どのようなことを調べたいのか、事前にご相談いただければ必要な資料を用意し対応します。
「神田バスケットボール資料室」 問い合わせ先 contact@jbbs.jp
資料コピー代 A4 サイズ 1 枚 10 円、 対応時刻 (火、木) 10:00 ~15:00

- ◇ **会員・部員の募集**をしています。
皆様の周囲の方々を振興会会員にお誘いいただきたくお願いします。振興会紹介パンフレットはホームページから得られます。もしくは、事務局にお問い合わせください。会員の方、振興会の仕事にご参加下さい。ご自分で新しい仕事をされても結構です。できれば何かの仕事に必要な知識をお持ち、パソコン操作が得意、などの方は歓迎です。手持ち無沙汰な方は事務局までお声かけください。事務局では大歓迎です。

- ◇ **会費納入のお願い** 会費未納の方をお願いします。
振興会は会員の皆さんの会費によって運営されておりますので、早めの納入にご理解とご協力をお願い申し上げます。

振込み口座番号

ゆうちょ銀行	00100-3-316035	NPO法人日本バスケットボール振興会
三菱UFJ銀行	神保町支店 普通預金口座 1684743	特定非営利活動法人日本バスケットボール振興会
みずほ銀行	丸の内中央支店 普通預金口座 1004687	特定非営利活動法人日本バスケットボール振興会

プラザ こぼればなし

- ◇ スポーツ振興くじ (toto) の対象にプロバスケットボールBリーグを加えることを盛り込んだスポーツ振興投票法改正案が 12 月 2 日の参議院本会議にて賛成多数で可決し、バスケットボールがスポーツ振興投票の対象に追加される予定になったという。改正法案については、超党派の国会議員でつくるバスケット議員連盟は 11 月 20 日に開いた合同会議で、26 日からの臨時国会で早期成立を目指すことを確認。合同会議は、早期実現を望むBリーグの島田慎二チェアマンらスポーツ団体からも要望書を 10 月 20 日に受け取ったといわれていた。2022 年秋のスタートを予定しているとのこと。
- ◇ アメリカプロバスケットボール協会NBAでは、例年通りの開幕時期とレギュラーシーズンの試合数が来年の東京オリンピック開催時期と重複する状況になるため、NBA選手のオリンピック参加が困難になる可能性がある。これを避けるため、NBAは、12 月 22 日の開幕を目指す方針を決め、試合数を 82 から 72 に減らし、東京オリンピックまでに全日程を消化する新シーズン開催案をまとめた。NBA選手会は、11 月 9 日、2020 年～2021 年シーズンを 12 月 22 日に開幕することでNBAと合意。レギュラーシーズンは 72 試合で、日程の詳細は後日発表される。
この合意によると、東京オリンピックまでに全日程を終了する見通しで、八村塁選手を含むNBA選手の東京オリンピック参加に可能性が広がるとみられる。
- ◇ バスケットボール女子元日本代表の大崎佑圭さん (30 才) =旧制・間宮=が東京五輪の延期を受けて 8 月に引退を発表した。経済的負担が重く苦渋の決断であったと報道されている。一方バレーボールの荒木絵里香 (トヨタ車体) 選手 (36 才) は、8 年ぶりに女子日本代表の主将に復帰した。「選手」と「プライベート」の両立が難しいなか、今後ママさん選手の活動を支える環境を整えることも必要ではないか。
- ◇ 12 月恒例の東京での「BASKETBALL BIRTHDAY CLASSIC 2020」、委員会では本年も開催を予定していたが、新型コロナウイルス感染防止の観点から中止になった。この「12 月 21 日はバスケットボールの日」のイベント開催を毎年楽しみにされていた皆さんにとっては残念な報告である。来年は、これまで以上に皆さんに楽しんでいただけるような、安全で安心なイベントの開催を目指し取り組む予定とのこと。期待したい。東京以外の道府県の開催状況は如何か、次回にお知らせしたい。
- ◇ 年末恒例の全日本大学選手権大会 (インカレ) が 12 月 7 日から代々木第二体育館と大田区総合体育館で開催される。今シーズンコロナ禍で多くの大会が中止となってきたが、インカレもその影響を受け、無観客での開催となる。代々木第二、大田区総合とも 3000 名以上の観客が入場可能であり、無観客というのはいかにも寂しい。感染予防の工夫をして、せめて 1000 名位は観客を入れられないものだろうか。

NPO法人
日本バスケットボール振興会
〒101-0051
東京都千代田区神田神保町1-40
豊明ビル 301号室
電話／FAX (03) 3219-9311
メール contact@jbbs.jp
